

シマフクロウ

シマフクロウは世界最大のフクロウで、絶滅危惧種となっています。森林伐採により、シマフクロウの営巣地は世界中で減少しているものの、知床の厳しい保全対策により、同半島の森林には安全な生息地が残されています。大木のくぼみをねぐらとし、浅い川で餌をつります。羅臼町を訪れた際は、シマフクロウが営巣地を離れて狩りに出かける夕暮れ後にこの鳥を目にすることができるかもしれません。

シマフクロウ鑑賞

他の野生動物同様、フクロウに遭遇できるかは保証できません。ただし、長年の観察により、行動パターンが分かっています。シマフクロウはねぐらをあまり離れることはなく、定期的に同じ狩場へ戻って来ます。季節によるものの、シマフクロウは夕暮れ後に活発に動くことが多い生き物です。11月には、日暮れごろに現れる傾向があります。ただし、繁殖期の2月と3月には、もっと遅い午前1時ごろに現れることが多いです。知床半島には複数の鑑賞ポイントがあります。道の駅 知床・羅臼のスタッフが場所をお勧めの場所を教えてください。

ブラキストン線：種の境界線

シマフクロウの英語の名前（Blakiston's fish owl）の由来は、北海道と本州の境界線を指すブラキストン線に由来します。この線より北部に住む動物は北アジアの種が親せきで、大型になる傾向があります。この線より南部に住む種は、南アジアの動物と共通点が多く、小型になる傾向があります。ブラキストン線という名前は、この境界線を最初に作ったイギリスの探検家で博物学者の Thomas Blakiston（トーマス・ブラキストン：1832～1891）に由来しています。